教壇生活四十年
——わたしの足跡——

諸富文紀

はじめに

越し方は流転かあらず。四年半なり。心かたむけ業はなし来つ

紅林茂夫

このたび、2001年3月末日をもって、20年間奉仕してきた関西大学を退職させて頂くことにした。私が懸せんごこしをといわれられるかもしれないが、あたりに施行された選択定年制の適用を申請し、受理されたことによるものである。本来ならば、学生の皆さまに最終講義をすべきところであるが、特にお願いして、本誌に拙文を寄せることでお許しを頂いた。現在、咽喉をいたっているためである。数年間、退職を迎え、老母の養親を看取った頃より、「余力のあるうちに老いを創めたい」と考えるようになったのは、聖路加国際病院の石野原重明のエッセイ『老いを創める』（朝日文庫）を読んだことが契機となっているのかもしれない。ひそかに懐いてきた願いを、心よく許してくれた家族に、感謝している昨今である。

教壇生活四十年。思いかえれば、教師としては恵まれた道を歩ませて頂いたと思う。良き師、良き先輩、同僚の諸先生方に教えを受けられ、また、何よりも良き生徒・学生の皆さまでお会いできたことは幸福であった。とりには、厳しい風雪に直面しなかったわけではないが、よくここまで歩き通してこれたなと思う。多くの人に支えられてきたことに、あらためて感謝したい。

これまでのわたしの職歴を簡単に記すと下記の通りである。

1959年7月 東京都立赤城台高等学校教諭
1968年4月 創価中学校・高等学校副校長
1981年4月 創価通信教育部専任講師
1986年4月 創価教育学部助教授
1999年4月 創価教育学部教授

この間、1979年9月から1年半にわたり、内地留学を許され、創価大学経済学部で研修する機会に恵まれた。関順也教授と紅林茂夫教授のご指導をいただく光栄に浴したことは、わたしの幸いとするところである。

学術研究の一端でありながら、与えられた職務に対し、自分なりに一生懸命取り組めたことは、諸先生方のご指導によるものである。しかしあつた、職責を十分に、はたせたといえないことも事実である。「われわれの意見によれば、いまだかつてただの一日でも、おのれの義務を完全に果たしうた人は一人もないのである」（『幸福論』）。いまは、このスイスの哲人・ヒルティ（C. Hilty）の言葉に、なごさめられている現在である。大学関係者の皆さま方にする感謝の思いを懐きつつ、この拙文をしたためさせて頂いた。ご笑覧、ご叱正いただければ幸いである。

—11—
公立学校の教師を目指して

わたしは至って志の低い人間で、青年時代にいたっていた将来の志望は、「学校の教師でもしながら、のんびり人生をすごしたい」というものであった。いわゆる『デモ・シカ教師』の一員である。この言葉は、文相をとめた故永井直雄のものであるが、教職を目指す青年に対する蔑視の意味が込められているように思えて、わたしの深い言葉であった。「先ず生きる」ために、教職を目指して東京学芸大学に入学したのは、1954年の春であるが、無事4年間で卒業できたのは、まったく一教授の特別に優れた人材をこずけるものである。あたり名誉なことではないので、これ以上のこととは筆にしない。留年してたら、おそらくその後の人生の歩み方を変えっていただろう。

現在の学生の皆さま方に、参考になるとは思えないことで恐縮であるが、学生時代の懐い思い出として書きとめておきたいことが2つある。1つは、河合栄治郎の著作にふれたことである。神田の古書店で貰い求めた『河合栄治郎・伝記と追想』一冊のときの感動は、いまでも鮮明に思い起こすことができる。といっても河合栄治郎を知る学生は、ほとんどいないと思えるので、若干申し訳なかった。河合栄治郎は、戦前の東京帝国大学教授で、学生の指導にあたるたび、多数の著作を通して深い影響を及ぼした自由主義者である。マルクシズムの批判者であった彼は、満州事変以後のファシズムの高揚に対しても、果敢に論陣をはて闘った。対日関係攻撃などで、著書『ファシズム批判』『社会政策方針』などが発売禁止とされ、大学は休職処分に付された。1944年2月、54歳で急逝されたが、著書『学生に与る』は、現代教養文庫のうちにおさめられ、現在の学生層にも読みつがれている。

とくに、『あらゆる意味で先生に殉じたね』と南原繁（元東大総裁）が賞賛した木村健太の伝記の部分は、その後も何回か読みなおした。南原重男が、「河合栄治郎先生ほど、人によって評価の端に残る方も珍しい」（『河合栄治郎の像』）と述べられているが、わたしは、彼の意味での自由主義思想家とよべる学者ではないかと考えている。学生時代に、何故に河合栄治郎の著書を読んだかについて考えてみると、当時の「転向」の問題がよく友人の間で話題にされていたことが、1つの原因であったのかもしれない。

辞書『日本語大辞典』には、「転向」について、「①方向・好み・やり方などを変えること。②それまでの主義・思想を捨てて、ほかの考えに移ること。とくに、権力の追害により政治的・思想的立場を転換すること」と説明されている。わたしが用いる意味は後者であるが、戦前の共産主義者の転向とは全く違った。戦前に軍国主義・超国家主義思想を鼓吹していた学者や評論家が、8・15の玉音放送をきっかけに一転して、民主主義思想を高唱に主張する反日の状態をとっている。残念なことだが、教育者や教育学者とよばれる人達のなかにも、数多くの転向者があいたことは事実であった。俗に「君子転変」といわれる。この「易經」にあることばは、自分につながる悪になるところ、すぐに、考えや態度をかえる意味で多くつかわれている。思想的節操を捨てた教育者が、何を述べたとしても、信じられないのではないだろうか。長浜政明「教育の戦争責任と教育者思想と行動」（明石書店）は、転向した教育学者の言動を実証的に解明した著書であるが、関心のある学生に一読をお勧めしたい。軍部権力に迎合する指導者がいるなか、唯一筋の孤高の道を歩き、半世、叱叱たせずに倒れた河合栄治郎の生涯は、人間としても立派なものであったと思われるが、どうであろうか。

「読みぬましし」書はひらきたるままにして 君は亡きかもいまの現に」。歌集『形相』におさめられている南原繁の哀歌である。

語らせていただきたいと思う1つの懐い出は、大塚久雄の「近代欧州経済史序説」を読んで、
学問の面白さを味わった体験である。大学2年の折、東京経済大学の依光教授から、週1コマ、「貨幣論」（現在では「金融論」とよばれている）の講義を受ける機会があり、授業中「近代欧州経済史序説」を紹介された。依光先生の講義は、わたしにとっては、もっとも教わるところの多い講義で、必死で筆記し直したノートは、今でも大切に所持している。あとで知ったことがあるが、依光先生は紅林茂夫教授の学友であった。まことに世間は広いので狭いものである。大学図書館の蔵書にはない書物だったので、暑い夏の数日間、図書館にかよって読破したことを、いまは懐かしく思い出す。

ことわざまでもなく、大塚久雄は、「大塚史学」とよばれる経済史の体系をきらかれた経済史家であり、1992年に文化勲章を授与された学者である。『株式会社発生史論』などの名著を書かれ、またマックス・ウェーバーの研究でも知られているが、社会科の教師を志望している学生であれば、大塚先生の著書を読まれておおきるとよいのではないかと思う。4年間の大学生活で、何冊の書物を読み得たからかわからないが、読書の遺案になった書物をあげようといわれれば、ためるということなく、小泉信三著『読書論』（岩波新書）をあげたい。この書は、いまでも、わたしの座右の書である。

幸いにも、現役で教員採用試験（東京都・高校社会）に合格できたが、専任教員として採用されたのは、卒業してきた年の翌年7月のことである。その間、大田区立の中学校で、助教授や講師をつとめ、かたわら、不安な心をいただきつつ就職活動に備えた。就職できたのは、まったく運が良かったしかないのではない。ほとんど不可能視されていたのである。専任先は東京都立赤城台高校で、校舎は新宿区山吹町にあり、早稲田大学の近くにあった。当時、その学校には学識豊かな先生方がそろっておられ、若輩のわたしの面倒をよくみて下さった。まったく恵まれた教員時代だったと感謝している。

全日制普通科の高校で、戦前高等女学校であった故か、男女共学とはいえ、女子生徒の数が多かった。1959年7月から8年有余、この学校で勤務させて頂いたが、学力不足のわたしは、たえず教材研究においまくられていた思いがする。高校社会科の科目「一般社会」は、昭和30年代の学習指導要領改訂によって、「社会」となり、また「政治経済」と「倫理社会」とに分化させていくのだが、その内容は大変高度なものであったと思う。政治学や経済学や歴史学等の専門書を読みつづけが、多少とも心にゆとりをもって教壇に立てたのは、5年くらいの歳月がたつからではなかろうか。幸い授業を受ける生徒が秀れていたので、浅学なわたしでもつとまったのである。当時高校への進学率は、中学卒業生の60％くらいなもので、家庭も中産階級の家が多かった。

この学校で、週18時間程度の授業を担当させて頂くかわたる、学年担任を3年間つとめ、校務分掌として主に生徒会の会計を担当し、また1年間、労働組合分担の責任者の仕事も経験させて頂いた。生徒指導の難しさを体験できたのもこの時代である。それともとに、学問の対立など、教員社会の裏面の醜さを知ったのも、この公立高校教員の時代で、他人との交際の難しさをも経験することが多かった。生来、他人との交際が下手で、これについて、趣味もたないわたしが、よくとめられたものだと思う。多くの人に支えられてやってこられたのが、いまにして深く思いしむのである。創価高校設立準備のために、1967年春、都立高校教諭の任を退任させて頂いたが、それは高校紛争が激化する直前のことであった。お世話になったぜひもののお礼の申し上げとして、大切に持っていた「阿部次郎全集」（角川書店）を、高校図書館に寄贈させて頂き、長年勤務した学校に別れをつけた。
創価学園建設の時代

正式にいえば、「創価学園」という名称は、学校法人名であり、現在7つの学校を経営している「法律に定める法人」であるが、ここでは、東京都小平市にある創価中学校と創価高等学校を総称して、「創価学園」とよばせて頂く。両校の開校は、いずれも1968年（昭和43年）4月である。創価中学校の創立者は、1963年7月に発表されていなかったが、具体的な準備がすすめられるようになったのは、1966年4月に創価学園運営委員会が発足して以降である。開校にも、筆者は委員会の一員として、当初から設立の準備に参画させて頂いた。小平市にある校地は、創立者が創価学園第2代会長に就任される直後、すなわち1960年4月に、購入が決定されたものである。教育こそが創立者の最後に着手される事業であると自負し、毅然、筆を正す思いがしたことを思い出す。任命されたたかには、全力で仕事をさせて頂こうと決意した。

学園建設の詳細な経過については、種々の出版物に記されているので略記させて頂きたいが、学園建設の仕事にたずさわることができたことは、わたしの人生でもっとも名誉なことである。開校準備のため、1967年春にそれまでの勤務校を退職し、創価学会本部職員の一員として仕事することになった。学校法人の設立認可と中学校・高校の設置認可申請にむけて、1日も休まず、無我夢中で働く日々が続いていた。私事で想鱗だが、長女の出産をひかえて実家に帰っていた妻の妹から、「女の子が無事生まれました」と電話で知らされても、すぐ駆けつけられなかったので、今だにその時の負い目を心に納いている。この長女も、現在、2児の母となった。まことに、光陰末の如しである。

校舎建築の設計や設備・備品などの研究で、訪問させて頂いた学校は、10校数にも及ぶであろうか。その過程で、高校に中学生を併設する具体案が結実したのである。委員会の議決をへて、中高一貫教育が国見たとされ、創価中学校が高校と同時に開校するほのぼのとなった。偉大な哲学者とあがれられるアラン（Alain）が、学界の最高権威であるソルボンヌ大学の教授もなからう実力と名声を有しているが、あくまでも、生涯リセ（フランスの高等中学校）の高等中学教授であったことを通して、中等教育の重要性を教えることがあろう。多感な青少年を相手とする中等教育の難しさにしようというもの。他校と比較すれば、歴史もあきらか学校から、秀れた人材が多く輩出された事実を目にすると、あらためて、創立者の深い祈りと生徒一人ひとりにそそのかされた恵美の深さに感銘を受ける者である。学園建設の草創期、苦労を共にして下さった教職員の方々、また応援をお持ちになった地域の皆さま、そして大切な子弟を学園におくって下さった保護者の皆さまに対する感謝の思いはつらい。わたしは創価学園の任命を頂いて、この恵みある仕事を参画させて頂いたことを、何よりの誇りとしている。「労苦と使命の中にのみ人生の価値」創価のブロンズ像の台座に刻印されたこの訓言に、深い感謝をおぼえる日々である。

学園の教員であった最後の1年半は、創大における内地研修の期間である。理事会の特別のご配慮によるものであるが、わたし個人にとっては、これほど嬉しいことはなかったといってよい。学園の管理職の仕事は、賛務という以外にないものであった。普通の学校とことなり、地方からの生徒を受け入れていたから、多いときは、3つの学寮をも、またそこに収容しきれない地方出身の生徒のために、10軒ほどの下宿先があった。生徒の生活指導や保健衛生の問題などで、教職員の負担は、少なかったものがあったが、愚痴1つこきさに耐えぬき、職業を遂行して下さったことに対して、今までも根の下で思いがしている。風情がはやった時代は、大変であった。人様の大切な子弟をおまかに待つ労苦が、どんなに大きなものか。経
教育部では、それまで、玉川大学で使用していたテキストを使っていたが、学習指導要領の改訂にともない、本学での編集と出版が求められている時期であった。

卒業生、通学課程の学生に「社会科教育法」を講じられていた山口弥一郎、野間三郎、関順也の三教授と、創価高校で日本史を教えられていた千葉元義先生の協力を得て、完成にこぎつけることができた。大変残念なことに、上記4名の先生方はすでに鬼籍に入られていたが、これらの先生方がおられなかったならば、テキスト『社会科教育法』の上梓にはいたらなかったであろう。編集の主要作業にあたったわたしは、多くの「社会科教育」に関する著書を読みたい気分になったが、いずれの書物にも満足できなかった。とくに、実際に教壇にたてて教えた経験を持たない学者の教科書には、正直いって失望した。2か月間苦労した末、内容構成を総論と各論の二つの部分にわけ、後に「社会科教師論」と題して、関順也先生に玉藻をお願いした。このなかで、関教授の述べられた、「教師たるものと欲するならば、まず教師たる心得人間にない」との言葉は、いままでもわたし自身の社会的言葉をさせて頂いている。関先生は本当に立派な学者であり、教育者である。わたしたしの誇りとしている恩師である。

教科書の「総論」と「各論」の公民の部分は、野間教授とわたしたしの担当とさせて頂いたが、この時ほど、原稿を書く辛さを味わったことはない。「児童の難」とはなく、『原稿の難』である。400字原稿用紙約400枚の掲目をうずめるのは、週刊のわたしにとっては容易な仕事ではなかった。創中央図書館から多くの図書を集め赤出し読む、また机上の原稿用紙に向うので、一日かかっても一、二枚位しか書けないことも多かった。行き詰まった時、よく通信教育棟の裏山にて夜歩こうがり、空を流れる白鳥をみつめたものである。

原稿執筆の完了は、山口弥一郎教授が一番はやかった。聞くところによれば、先生は毎晩、日本酒をめしをししながら午後7時のニュースを聞いて就寝し、夜中の2、3時に起床されて机に向かわれるという。そのため、山口家には番犬はいらないといわれていた。僕のものだと痛心の述べたのは言うまでもない。4月に編集作業を開始し、12月に完成をみた時にはホッとする思いがした。事務局の方々のご好意で、関係者の慰労をかねたささやかな会食会を催して頂いたことには、いまだも忘れがたい思い出である。

テキスト編集以外には、通信教育の機関誌『学光』の編集作業があった。当時の通信教育部専任教員は6名で、順番に編集作業にあたるのであるが、未経験のわたしにとっては、一から十まで同僚の先生方に教えて頂く仕事である。この仕事を通じて、活版の大きさや校正正記号など、初めて知ったのであるが、この経験はその後のわたしの仕事に大変役立ったものである。差別用語の使用など、いつの間にか「活字の悩み」知ったのもこの時であった。様々なことを親切に教えて頂き、楽しく仕事をさせて下さった同席の先生方に対する感謝の思いはつきいない。昼食のときは共同研究室に集まり、心おきない会話をしながら、食事を楽しんだ。そこには情報交換の場でもあり、気軽を深める機会でもある。そして年1回の2泊3日の旅行。それは楽しい休暇の時間であり、部長や副部長の先生方とご一緒に、遠慮のない懇談ができる機会でもあった。初代通信教育部長をつとめたとされられた佐藤和正先生には、本当にお世話になった。暖かく接して頂いた先生の温かい、筆者にとって、忘れがたいものがある。

通信教育部で5年すごしたあとは、教育学部に移ることになる。教授会の末席に坐るようになったが、高等教育に未経験でなかったし、勉強すべきことが少なくなかった。筆者には大学院で学んだ経験がない。学部卒業後、すぐ中等教育の現場にとびこんだわたしは、研究らしい研究もしてこなかったのである。それが絶えず心に負い目を感じさせずにおかげなかったが、ローマ皇帝のマルクス・アウレリウスがしたための「自省録」（岩波文庫）の一節が、わたしの心を励まし続けてくれた。
創大教育研究第10号

「つぎのこともまた虚栄心を棄てるのに役立つ。君の生涯全体、あるいは少なくとも君の若いとき以来の生涯を、哲学者として生きたとするわけではないということだ。多
くの他人や君自身にも明らかに考えたことがある。だから君は哲学から遠く離れてい
る。だから君は面を
失い、もはや容易なことでは哲学者としての名声をかちうことはできない。根拠の条件か
らしてこれに反しているんだ。ゆえに君が問題の所在を真に理解したのならば、人が君のこ
とをなんと思うかなど気にするのではなくて、君の余生が長くなら、短かれと、これを自
然の欲するがままに生きることができた。それで満足せよ。」（神谷英恵子訳）

数年おきに、研究業績を報告しなければならない状況に身をおく、いやでも原稿用紙に向か
うことが義務づけられる。それは浅学な筆者にとっては、時には、胃がキリキリと痛む仕事で
あった。教科書執筆の体験から、社会科教育学の研究分野に進んだのであるが、大学時代の学
友が、母校で活躍されていたので指導を受けることが出来たのは幸いである。社会科教育学の研
究団体に加入し、毎日開催される全国的な研究大会にもつとめて参加し、研究に対する示唆と
刺激を受けることが出来た。

他の教科教育学とはことなり、社会科教育学には対深いものがあるのである。教科書「社
会科教育法」の序文で、山口光一郎博士は、「教育という言葉に、いつも若干のひっかかりを
感じることが、教育者となると、さらに考えたのである。これを教育の手段・方法・知識の切り
売りなどとは、少し考えないで、自分の内に秘めた教義を含めて静かに努力して皆さんで
みている」と述べられている。山口教授は、地理学や民俗学研究の分野で著名な学者である
が、社会科教育学研究の難しさに気付かれていたのである。正直に、わたしの感想
を述べると、一部の著作を除いて、社会科教育学の書物は一般に面白くない。こういうと、お
叱りを受ける恐れがあるので、あまり口にしない方が良いです。

ところで、政治学者の丸山真男は、座談の達人といわれ、岩波書店から「丸山真男座談第
一冊」が刊行されており、そのなかに、1948年9月号の「教育」（世界評論社）でなされた菅
原誠一との対談が掲載されている。その対談で丸山真男は言う。「ぼくだって、教育教育と
ふた言目には言うくせに、教育学の本や雑誌はほとんど読んでいない。どうも教育学というも
のはつまらなくて敬遠したくなる。一体これはどういうところから起きているのか。欧米では
どうなんでしょう」と。丸山真男がぶつけた「学術的問題」であるが、教育学という言葉を
「社会科教育学」という言葉におきかえてみれば、現在でも、この疑問に納得のいく説明
ができる状況ではないのである。浅学なわたしにはお答えできない。そもそも、「社
会」科というものが、戦後の初等中等教育における、教育課程のなかでの教科として設けられた
ものである。それ以上のものでも、それ以下のものでもないのである。それを、占領下とはいいえ
、「花形教科」であるとか「新教育のホープ」であるとかいう、もてはやしたところにも問題
があったのではないかろう。時流に便乗した学者の意見には、注意したいと思う。

そこでわたしは、社会科教育学の源流ともいわれる公民教育の史的考察から着手し、「近代日
本公民教育史の研究」と題する論文を、3年間にわたり、教育学部の専門を担っていたした。
そして学習指導要領に示された社会科の背景を分析してみたとき、左右両派のイデオロジー
が、社会科教育研究に色をえ、とう形されてきたことを知って脅し押しつけたものである。
おそらく、他の教科教育学研究にみられない、社会科教育学研究の特別な難しさも、そこにあ
るといえるのではないか。そして再現にもとづく理解構築が、社会科教育学の研究者に求
められていることが強く意識されるようになった。国際連携教授からは、牧口常三郎先生の価
値論を土台として、研究を深める必要があると指導されてきたが、いまだに、具体的な研究論
文としてまとめることができていない。筆者の非才と怠惰によるものである。

—17—
おわりに

六十五才の誕生迎え 新らしき命に われは燭を点ずる

紅 林 茂 夫

歌集『残雪』におさめられた一首である。長年の銀行生活に別れをつけ、創造大学教授として教鞭をとられるようにになったころの短歌と伺った。2・26事件のおきた1936年2月に生まれたわたしも、65歳の誕生日を迎えるにいたった。往事をかえりみて、多少の感慨もないわけではない。しかし、余生をいかに意義あらしめるかが、囲顧よりも大切な問題となってきたことを知るのである。

若いときから読んだ書物で、心に残るものをいま一度繰してみたい。論文やレポートを書くためではなく、自分の精神を少しでも高め、よりよい人生を生きるための読書に多くの時間をさきたいと思う。いま老人性白内障がでかかって、元教え子の眼科医に治療を受けていますが、買い求めても、まだ聞いていない書物をみると、残された生の時間の貴重さを教えられる。愛読書としてきたモンテーニュの『随想録』には、下記のような一節がある。

「われわれは、たいへんな馬鹿である。われわれはこんなことを言う。「彼は無為に一生をすごした。彼は今日は何もしなかった。」——何を言うか？ あなたは生きたではないか？ 生きるということは、あなたの根本的な仕事であるばかりでなく、あなたの仕事のなかで最も輝かしい仕事である。……われわれの品性をつくること、これがわれわれの一つめである。本をつくることがわれわれのつとめなのである。……われわれの偉大なる輝かしい傑作は、立派に生きることである。」（松浦信三郎訳）

ちょうど100年前の1900年に、スウェーデンの女性解放思想家として知られるエレーン・ケイは、『児童の世界』を著し、婦人の権利や児童教育に関する革新的な提案を述べ、20世紀に期待をかけた。残念なことだが、20世紀を「児童の世界」となされなかったことは、人類にとって、痛恨しわかりない歴史上の事実であろう。それは、「戦争と革命の世紀」であり、数えきれない多くの尊い人命が失われた世紀であった。南原繁が「日本のヒルティ」と称した三谷隆正は言う。「教育は人間の全人全霊にかかわる大問題である。重くて確固たる人生観の基礎なしに、確固たる教育意見を樹立することはできない」と。現実、地球の問題に直面して、人類の存亡がかかっている時期に、いま、わたしも生きていることを思うと、わたしに何ができるのかを問われているようにも考えられる。馬鈴をかきなべ、筆者の思いあがりであろうか。

山茶花のここを寄斎と定めたり

正 唐 子 規

おわりに、創価大学の益々のご発展と教職員の方々のご活躍を祈り、また、拙い講義を熱心に聴講して下さった学生の皆さまのご多幸を念じ、携筆とさせて頂きたい。本当にお世話になり、有難うございました。

（2001年1月）

—18—